

## 「リズムダンス」再考 Reconsideration of “Rizumu-Dance”<sup>1)</sup>

原 田 奈 名 子  
(教育学科教授)

### I. はじめに

#### 1. 目的

学習指導要領にダンス（小学校では表現運動）の新しい領域として「リズムダンス（小学校）」、「現代的なリズムのダンス（中・高等学校）」（以下、「リズムダンス」と記す）が平成10年に導入された。約20年経った今でも、リズムダンスの学習内容と指導法について共通理解に至っていない現状があるように思える。たとえば2017年度の舞踊学会（12月）において、中村は16年度学生評価が低かったヒップホップをテーマにした自らの授業実践について17年度指導内容を修正して実践したところ評価が上がったと報告した<sup>2)</sup>。それについて「評価が上がったのは音源刺激のテンポが対象者に合っていないのが修正されたからではないか」という指摘があった。中村は指導内容を修正したが、単に音源の速さの問題だと受け取られていた。筆者は、「発表は『リズムに乗って』としているが、それは『拍に合わせて』ではないか、映像を見る限り、示範も学生も拍に合わせている様に見える。リズムと拍を同義に捉えている。」と指摘した。また、田巻他は舞踊指導者に対するインタビュー調査から、指導要領に記載されている「リズムに乗って自由に踊る」の「リズムに乗って」と「自由に」の解釈に統一がないことを指摘した<sup>3)</sup>。2017年3月、新学習指導要領が公示され、リズムダンスの技能は小・中学校とも現行と全く同じ文面であった。

筆者は平成15年「リズムダンス・考」を発表した。それは教員免許関連ダンス授業において、「リズムダンスとは何か」を問いながら試行的

実践をしていたからである。当時多くの疑問があった。そこで自問自答しながら論を進めた<sup>4)</sup>。

本稿はそれを踏まえ、加筆修正しながら、導入から約20年経った今、改めてリズムダンスについて問うことを目的とする。

#### 2. リズムダンスについての疑問

現在もやはり多くの疑問が解決されていない。先述したように、なぜ共通認識に至らないのか。

まず現行の平成20年の学習指導要領を検討する。「リズムダンス・現代的なリズムのダンスのリズムと動きの例」として表1が示されている<sup>5)</sup>。「リズムに乗って全身で自由に踊る」について、「自由に」に関して、学年進行に応じて、「友だちと自由にかかわり合って踊る（小学校3・4年）」「自由に弾んで踊る（中学校1・2年及び3年）」とある。

詳細を見る（以下の引用内傍点は筆者加筆）。小学校中学年の技能「イ、リズムダンス」には「軽快なロックやサンバなどのリズムに乗って全身で弾んで踊ったり、友だちと自由にかかわり合ったりして楽しく踊ることができるようにする」とある。「友だちと自由にかかわり合ったり」は技能であると同時に（2）態度「（2）運動に進んで取り組み、だれとでも仲よく練習や発表をしたり、…」とあるように、「自由にかかわり合う」は「態度」とも読むことができる。

一方、中学校では、「軽快なリズムに乗って弾みながら、揺れる、回る、ステップを踏んで手をたたき、ストップを入れるなどリズムを捉えて自由に踊ったり、…（1・2年生）」のよ

表1 リズムダンス・現代的なリズムのダンスの「リズムと動き」の例

文部科学省2008

	小学校3・4年	中学校1・2年	中学校3年
リズムに乗って全身で自由に踊る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・軽快なリズムに乗って全身で踊る</li> <li>・ロックやサンバのリズムの特徴をとらえて踊る</li> <li>・友だちと自由にかかわり合って踊る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロックやヒップホップのリズムに乗って全身で自由に弾んで踊る</li> <li>・ロックやヒップホップのリズムの特徴をとらえて踊る</li> <li>・簡単な繰り返しのリズムで踊る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リズムに乗って体幹部を中心に全身で自由に弾んで踊る</li> <li>・ロックやヒップホップのリズムの特徴をとらえて踊る</li> <li>・仲間とかかわり合って踊る</li> </ul>
まとまりを付けて踊る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・変化を付けて続けて踊る</li> <li>・友だちと調子を合わせて踊る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リズムに変化を付けて踊る</li> <li>・仲間と動きを合わせたりずらしたりしてリズムに乗って踊る</li> <li>・変化のある動きを組み合わせ続けて踊る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・踊りたいリズムや音楽の特徴をとらえて踊る</li> <li>・変化とまとまりを付けて連続して踊る</li> </ul>
発表や交流	・発表や交流をする	・動きを見せ合って交流する	・簡単なまとまりを付けて発表し見せ合う

うに、動きの選び方や拍の刻み方<sup>6)</sup>を自由にできることを目指す。3年生は「変化とまとまりを付けて、全身で自由に続けて踊ること」を強調する。「自由に続けて踊る」ために、「変化とまとまりを付ける」のである。『「変化とまとまりを付けて』とは、短い動きを繰り返す、対立する動きを組み合わせる、ダイナミックなアクセントを加えるなどの変化や、個と群の動きを強調してまとまりを付けることである。」よって、「自由に」とは、選ぶ動きにとどまらず、タイムの要素や群・構成の要素に変化とまとまりをつけられることを目指している。それは「発表・見せ合い」活動を意図するからだと解釈する。

このように、「自由に」は、学年進行に伴い強調点が移動している。「自由に」が、動き、拍の刻み方、群・構成、学びの態度と多岐に関わる。それが共通認識に至らない理由の一つと考えられる。

さて、筆者が問いたいのは、もう片方の「リズムに乗って」である。これが約20年前にも疑問であった。そこで、リズムダンスについて、学習指導要領に導入された当時の筆者の率直な疑問を学習ノートとして自問自答形式でまとめることによって、改めて「リズムダンス」の学習について問う。

なお、筆者の疑問やその回答から派生した考えを斜体文字にし、疑問に対する回答部分と区別して記述することにする。

## Ⅱ. 本論

### 1. リズムダンスについて

#### 1) リズムダンスという語はいつから？ どのダンス領域にもリズムは内在するのに、なぜそのようなダンス名称が登場したのか。

リズムダンスという語は、ダンスの機能的特性論の立場から分類が試みられ、リズム型、すなわち、「リズムを手がかりにして、またそれに対応して自由に動きを工夫し、変身することが楽しい」ダンスとして佐伯によって提案された(佐伯聰夫：ダンスの授業をめぐる諸問題について、体育科教育30(6)、1982、pp. 17-19)。約35年前である。ダンスの楽しさの質の検討から、「従来の指導において、表現することを強調しすぎていたきらいがある…これからは、踊る楽しさを中心として…」と、子どもと楽しさの関係に着目した。「分類を、定型型(リズム・フォークダンス)と創造型(模倣を含む)の二つとしたが…残された問題として、リズムを中心とした定型型から『音楽』を素材として、クリエイティブする事も創造型の学習で、重要な位置をしめないであろうか」とあるように、未だ図1に見

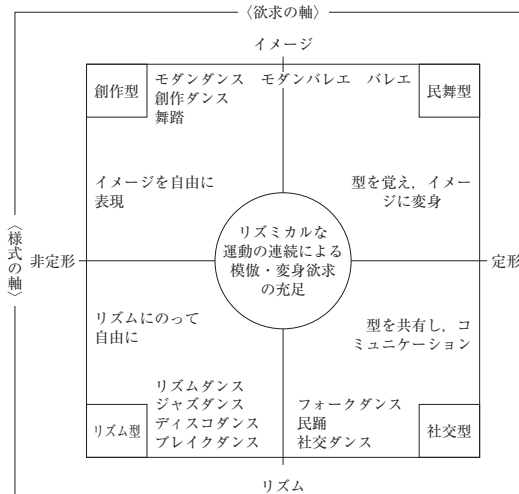


図1 学習内容の選定の視点 (三浦, 1994, P.17)

られる分類に定まっていない<sup>7)</sup>(全国体育学習研究協議会研究要項北信濃大会1982, 以下全体研と略述する)。翌83年には「定型型」と「創造型」が「定形的」「非定形的」に分類された。単元の組み方について、一年間の実践を踏まえ、一時間の中に創造型とリズム型を同時にするのではなく分ける方が望ましいと提案している。指導方法については、「曲を聞いてすぐ反応できなく、じっと見ている子どもが多く見られた」だから、「リズムにすぐ反応できない子どもに対しては、動きの例をいくつか提示し、その中から選んで動くようにした方が全ての子どもが踊る楽しさにより早く近づくようである」と報告している。そして、佐伯から図1の原型が示された(全体研福岡大会, 1983, 原型図掲載は要項P. 33)。「リズムを手がかりにして、それに対応し、自由に動くことが楽しい運動」の種目に「リズムダンス、ロック、サンバ、ジャズ等」と例示された(全体研埼玉大会, 1985, 要項P. 10)。そこには、図1(三浦弓枝, ダンスの学習指導, 1994)でも明らかのように、リズムダンスと音楽のジャンル名が併記されている。図1は機能的特性論から、学習内容選定の視点を示し、欲求充足の横軸と、文化の伝承と創造という様式軸を縦軸に四つの象限に分け、ダンスを欲求充足の立場から分類し、「イメージ」が重視されるものと、「リズ

ム」が重視されるものとに分類した。これらは、さらに、文化の様式から「型を伝承するもの」と「自由に創り出していくもの」に分類された。そして両軸から導かれるダンスをそれぞれ、創造型・リズム型・民俗舞踊型・社交型と呼ぶ(前掲, 三浦, P. 16)。この視点が平成10年告示の学習指導要領につながっている。

これを踏まえ、以下の疑問が湧いた。

#### ①リズムとは、「自由に」とは

85年の時点では、「リズムを手がかりに」という時のリズムは「音源刺激・曲」を指す。「自由に」という一方で、「動きの例をいくつか提示し」ともいう。「動きの例」を提示するということは、「振り付けた動き」ともとれる。リズムダンス、ロック、サンバ、ジャズ等を同時並列表記していることから、これらの音楽に応じた動きの例に則って(振り付けて)踊るとも解釈できる。

リズムがダンスを誘発する手がかりであると捉えるとき、リズムが「音源刺激・曲」になる。その解釈は適切か。

#### ②文化の型と教育で取り上げるダンスとの関係について

図1には、リズム型のなかに文化様式名称ではないリズムダンスが、創造型には同様に創作ダンスが記載されている。つまり、舞踊教育の教材名称と文化様式を持った舞踊名称とが混在記載されている。当時の学習指導の考え方は機能的特性論に依拠して、どんなダンスも子どもにとっては等価である、という考え方からこのような表記がなされたと解釈できる。リズムダンスという文化様式があるという誤解が生じている理由がここにあると推察される。さらに言えば、創作ダンスについても同様、ほぼモダンダンスと同じといわれるが文化様式とは一致しない。それは、西洋圏ではバレエのアンチテーゼともいう文脈から創出されたモダンダンスも、日本では明治期の開国に伴い同時期に移入されたという事情と、学校教育が独自の名称(内容)を与えてきたという二重の意味で特殊事情があることに由来すると考える。

## 2) なぜ学習指導要領に導入されたか？

平成10年度学習指導要領の「心と体を一体としてとらえ」「選択制をいっそう進める」とする改訂の趣旨を受け、ダンスは本来心と体が一体である領域であり、そういうダンスの価値を大切にすることや、「選択の幅を広げる」ことから導入が図られた。

村田（2002）は、導入の経緯について以下のように述べる。「リズムダンスは社会でのダンスブームを反映して子どもに身近に関心が高いダンスであり、これまでも授業の導入や運動会…の実践の積み重ね（検証）が今回の導入につながったといえるだろう。」「名称もここ数年で市民権を得てきている」と捉えている。「さらに、内容の広がり、社会で多種多様なダンスが享受されている生涯学習に対応したものと捉えられる」と述べる。（村田芳子：最新リズムダンス・現代的なリズムのダンス，小学館，2002，P.6）。

### ①何を根拠に、リズムダンスという語が市民権を得てきているというのか、また、どんな実践の成果（検証）があったか？

テレビや映画では、70年代の「ソウルトレイン」や80年代末から90年代始めの「ダンス甲子園」、ジャズダンスを多用したCMの氾濫、映画では「オール・ザット・ジャズ」「フェーム」「フラッシュ・ダンス」などが人気を博した。このことから、確かに舞踊を楽しむ人々の増加を確認できる。また、リズムダンスと定義づけられない札幌の「YOSAKOI ソーラン」から派生したダンスがリズムダンスと理解され、この種のダンスが全国各地にて行われた<sup>8)</sup>。運動会や発表会で踊られてきた<sup>9)</sup>。しかし疑問が残る。たとえば、学生に限らず多くの人に「祭」と商業的な祭（神なき祭）との区別がなく、だから、「（神ある）祭」の場で踊られる踊りと「〇〇ソーラン」との区別がない。よって、民俗芸能に内在する諸々の意味、動きと生活の関係、リズムなどについて目を向けることもない。そういった知識、認識を育てないということは舞踊教育にとって考えるべき課題ではないか。

また、導入された時点では民間教育団体内での授業実践研究であり、学会等での検証には

至っていなかったと判断される。

これらのダンスを学校で行うことが本質的に生涯学習に対応したことになるのか疑問である。2002年当時、ビルのショーウィンドを鏡代わりにラジカセ片手に若者たちがダンスに興じていた。が、今はどうだろう。「不易」と「流行」を見定め、何を学ぶことが生涯学習につながるのか、である。

では、具体的にはどのようなダンスなのか。

## 3) リズムダンスとは？

リズムダンスの小・中学校の平成10年の導入時と現行、および29年告示の次期学習指導要領解説に大きな変化はなく「リズムに乗って全身で自由に踊る」と説明される。

そこで導入時の学習指導要領解説作成協力者である村田芳子（小学校）と松本富子（中学校）、平成15年度文部科学省学校体育指導者中央講習会講師である牛山眞貴子らの著述からどう捉えているかみてみよう。

【村田の捉え方（最新リズムダンス・現代的なリズムのダンス，小学館，2002）（筆者傍点加筆）】

### ○特性（P.6）

リズムダンスは、現代に息づき、楽しまれているダンスの総称であり、特定のダンススタイルを指すものではない。音楽やリズムが踊る誘発材料となり、リズムへののりが特性である。ロック、サンバ、ヒップホップといった現代的なリズムのダンスは、時代の「今」の感覚と踊りへの原初的なエネルギーから生まれた自由なダンスである。これら「現代的なリズム」の音楽に共通している特徴は、いずれもメロディーよりもリズム（ビート）が主導的な役割を担っていることである。リズムに誘発されリズムを共有して踊る楽しさ、人間の根源的な「律動の快感」に根ざしており、これが「踊る原点」としてこのダンスの重要な側面であると述べる。

### ○指導の重点（特性の捉え方や選曲のポイント）（P.8）

小学校では、のり方がやさしく弾んで踊れるロック、サンバを…リズムにのって「弾んで踊る」体験を…。中学・高校では、のり方がやや難しいヒップホップなどのリズムを…。ロック



もサンバもビート主体のアフリカのリズムを起源としてとし、体幹部（おへそ）でとるリズムが特徴…。

○いろいろなリズムの特徴とのり方の工夫のポイント (P.9)

ロック：「リズムに体をのせる」ことがもっともわかりやすい。リズムに同調して…。リズムに合わせて…。

サンバ：ロックと同様にリズムに同調して…。シンコペーションのリズムの特徴をつかんで…。

ヒップホップ：「縦ノリ」のリズムで踊る。

「のり・のり」とは何か、リズムの取り方、動き方、動き方の工夫とどういう関係か？

似たような言葉がたくさん出てくる。「のり」、「ノリ」を楽しむ、のり方・動きの工夫、リズムと動き（のり方）、のり方がやさしい・やや難しい、縦ノリ、おへそでとるリズムなどである。

「のり」について特に解説している部分は見あたらないが、「のり方」は「リズムの取り方」であり、「リズムに同調」すること、「リズムに合わせる」ことと解釈できる。と同時に、やさしい、あるいは難しい「のり方」という記述より、「動き方」でもあると解釈できる。そうすると「ロック、サンバ、ヒップホップなどのリズムにのって、リズムの取り方や動きを工夫したり」は、意味が重複する。

当時何回か講習を受けた。講習中に動きの提案があった。そこで参加者から「動きを教えるのか」という質問に、「動き方は教えないが乗り方を教える」と説明された。

どうやら「リズムにのる」は、楽曲が持つリズムの特徴をつかみ、そのリズムに同調して踊ることを目指すと解釈できる。そして、「のり方を教える」は「楽曲が持つリズムの特徴」にあった「リズムに同調した」動き方を例示すると理解した。ではあるが、「リズム」をどう捉えているか、リズム（ビート）という表記からこれらが同じと捉えていると拝察する。

【松本の捉え方 (2002, 1999) (筆者傍点加筆)】

松本は、「リズムを一定の定義のもとで述べることに難しさがある」とした上で、動きの

世界のリズムを音楽の世界のリズムから類推しようとした。そして、音楽のリズムを成す「拍子、テンポ、アクセント、パターン」の4つの要素について、以下のように解説する。拍子は強点を周期的に設定したもの、一定の時間的間隔を持って刻まれる拍という単位によって秩序づけられる。「リズムは、より小さな単位に拍を分割して一つのユニットとして刻まれるパターンを持ち…」。そして、「『乗る』とは、調子に合うこと、調和することであり、また勢いに任せること、調子づくことである。」「『リズムに乗って踊る』とは、『ビートの創る強弱のあるパターンユニットに合わせて、調子よく体を動かし続けることであり、しかもリズムと動きの勢いづいたり心地よさを感じたりして、楽しんでいる姿である』と解している。「大切なことは、体の中からあふれてくる無理のない動きやアクセント、リズムユニットを大切に…」『『リズムに乗ること』を厳密に考えすぎず、…遊びながらリズムをはずしても笑い合い認め合う雰囲気と楽しむ余裕…『乗って』踊る本質がここにある」と結んでいる。(リズムに乗って踊るのが苦手な子どもの指導, 体育科教育学 vol. 48-3, 2002)

「リズムの取り方には、…前拍にアクセント…、ロックやヒップホップのような後拍にアクセント…、動きやすいビートとテンポを選んで踊るようにし…。特に自然な弾みやスイングなどのように体の中から湧いてくる動きを大切に踊るようにすると、体でリズムを捉えて踊る楽しさを味わうことができる」(改訂「学習指導要領」の内容 ダンス, 学校体育 Vol. 52-8, 1999)。

拍子とリズムと拍とビートの関係

「リズムに乗って踊る」とこと、「リズムの取り方」とそれとの関係もわかった。「リズムに乗って踊る」とは、「ビートの創る強弱のあるパターンユニットに合わせて…」とある。が、ビートがよくわからない。これらの用語の意味を確認しておきたい。

「音の強弱を規則正しく繰り返すと拍子(time, meter)が生まれる。拍子を構成する基本要素を拍(beat)という。拍子をつくる強い

部分を強拍（ダウンビート）、弱い部分を弱拍（アップビート or アフタービート）という。拍子をもとに音の長短を組み合わせるとリズムが生まれる」（七類誠一郎：黒人リズム感の秘密，郁朋社，1999，P.32）。ちなみに拍節という語もある<sup>10)</sup>。

リズムはラテン語の *rhythmus*（規則的循環）に由来する。ドイツ語であるタクト（takt）は、ラテン語の *tactus*（触覚）に由来し、大正になって移入され「拍，拍子，小節」と訳す。ビート（beat）は昭和に移入され「打つ，打ち続ける」の意であり，「拍子・拍」と訳す。タクトもビートも「拍子・拍」と訳され，リズム（明治期），タクト（訳語は拍子：大正期），ビート（昭和期）の順に移入された。

【牛山の捉え方（現代的なリズムのダンス，新学習指導要領による高等学校体育の授業下巻，大修館書店，2001）】

現代的なリズムのダンスは，若者のエネルギーを重ねやすいポップス，ヒップホップ（ラップも含む），ロック系の「音楽性（リズム，ビート，メロディー）に合わせて動く心地よくて，おもしろいと発想されるダンス」…現代的なリズムは8ビートと16ビートが主流であり，「メロディーよりも，このカウントを取りながらさまざまなリズムを組み合わせて，上肢と下肢の動きをつくる」ダンスと述べている。「高校生が現代的なリズムのダンスと呼ぶ」さまざまなダンスを，「黒人特有な運動のリズムを主体とした1970年代米国で始まったヒップホップ文化の中のストリートダンス型と，ショービジネス，ディスコ，クラブなどの娯楽空間やCD（音楽）の中のプロモーションビデオなど視覚的効果をねらったエンターテインメントとして踊られるジャズダンス型」に大別している。「現代的なリズムのダンスのルーツは黒人文化にある。しかし，80年代から“今を感じる”ダンススタイルとして…流行は終焉するどころか…国籍のない日本の若者の文化の代表的な一つになっている」と述べる。「現代的なリズムのダンスの特徴として，ステップに加えフロアー（床）」を使った技が多くみられる。」カポエイラ\*や武術をヒントにつくられた動きや，それ

以外にもスポーツの形態がストリートダンスの具体的な技になる例を多数挙げている。たとえば，ランニングマン（陸上競技），バイシクル（自転車），トーマスフレアー（体操競技）などである。『『身近にある運動を使って，現代的なリズムの音楽にのって踊る』という指導でダンスの学習内容を広げるとともに，…ダンスの楽しみ（リズムにのって踊り，仲間と交流する）を引き出すことができる（傍点筆者加筆）』と捉える。準備運動でボディー・アップとボディー・ダウンの動き方を取り上げるなど，「黒人文化」特有の動き方について解説している。\*筆者註，カポエイラは，アフリカン・ブラジリアンの格闘技から派生したダンス。

### 〈3人の論のまとめ〉

以上3人の捉え方をみてきた。このダンスで指すリズムは，音楽であり，それを動きの誘発刺激とすると確認した。気になることは，松本以外は，体や動きをリズムで捉える視点に言及していないことである。かつ，その動きが音楽のリズムとどのような関係にあるのかについても言及されているとは言えない。

また，学習内容の始源性と発展についても明瞭とは言い難い。幼児や低学年の場合は，手遊びや歌遊びが表現遊びでありリズム遊びである。自分で発声しながら自分の体のリズムで動く。このような始源の段階と，外界のリズム（音楽）と踊りを楽しむようになる過程において，発展の方向が，現行の学習指導要領に示される「群・構成の要素をいれる」方向でいいのか。また，「現代的なリズムの音楽（流行の音楽）特有の踊り方（技法）の習得を目指すなが，乗り方を学ぶという，その識別が曖昧である。

踊ることとリズムの問題を解くためにも，改めて「リズムとは」を先行研究から考えたい。

## 2. リズムについて

### 1) リズムとは？ 辞典や文献から

外来語辞典（三省堂，1993）には，リズムは「韻律・律動・調子」と訳される。音楽的には「節奏，律重力，音の長短・強弱の組み合わせが一定の決まりに従って連続すること。メロ

ディー・ハーモニーとともに音楽の基本要素の一つ」とある。

### 日本語では？

これらの外来語が入る以前の日本ではこれらをなんといい表していたのだろう。

今日のリズムの概念とぴったり一致する言葉がないからカタカナ表記をしていると解釈できるが、潮の満ち引きや、芽吹き開花する植物や労働の動き等についてなんと言っていたのか。リズムと同じような意味を表すやまとことばは、「しらべ」「うねり」「めぐり」あたりか。明治期の外来の訳語は韻律・律動・調子とう漢語である。白拍子という語が平安期には用いられていた。いずれにしても興味深い。

リズムについて、藤田竜生の「リズム—日本人の音感覚とリズム 風濤社、1976」に詳しく論じられている。そこに音楽辞典の解釈が記されている。まず音楽辞典にみる解釈から理解しよう。1955年刊と1965年刊の岩波小辞典「音楽」(山根銀二編)の「リズム」の項目には、他には見られない著しい変動があるという。第一に、その量が倍近くになっている点、もう一つはその内容だそう。その内容を以下に述べる。

- ①(ま)という言葉は単純であるが、より一層リズムの本質を表している—略—しかし、間という言葉は主に動と動との間の静止した緊張を指しているが、リズムという言葉には動き、流れの具合といった一層動的で広い意味が含まれている。
- ②…リズムは身体的行為や心理・生理作用、さらには運動し変化する〈存在そのもの〉の中に根ざして…。
- ③西洋近代の音楽は拍節的リズムの上に成り立っているので、拍節をもとにしてそれからリズムを割り出すような考え方が行われた。しかしこれは合理主義によって合理化されたリズムの認識のしかたであって…。
- ④日本の能はそのもっとも見事な例の一つで…
- ⑤民俗音楽やジャズ、さらにインドを始めとする東洋のリズムに学びながらリズム技法の豊富化が目立つ。

### ①音楽リズムを解釈する際の質の変化

10年間でリズムの解釈が大きく変化したとい

うことは、日本の音楽に限らず、世界の音楽全般において変更せざるをえない動きがあったことをあらわす。黒人音楽についても50年代にリズム&ブルースが、60年代には今日のファンクにつながるソウルが興隆した時期であり興味深い。

同じ頃刊行された音楽之友社の標準音楽事典(1966年刊)の総論の要約(野村良夫執筆)をさらにかいつまむと以下のようにまとめられる。

リズムという言葉は標準的にはこれまでギリシャ語の〈流れる〉に由来するのが普通であったが、最近ではもっと根源にさかのぼって、〈引く〉などに関係づけられるようになった。イエーガーは「舞踊と音楽におけるリズムのギリシャ的発見の根源的見解…は、活動ではなくて、反対に休止であり、運動の確乎たる区分」であるという。そして、音楽的リズムを正当に定義づけることは至難であると述べる。音楽的リズムに直接関係するものとしては、メートル(測る→運動の決められた区分)とタクト(拍子)などがある。メートルは時価の長短による秩序を意味することが普通で、それが音楽的リズムに他ならないという説と、拍子であるタクト—近代の小節縦線で区切られた上拍と下拍の交代—がリズムに他ならないという通説を紹介する。

クラークスは〈靈魂〉と〈精神〉を対立的に見る立場から、リズムは生命の生ける原理たる靈魂に対応する物で自由な生きたものであり、タクトは、概念的・人工的原理としての精神に対応する合理的・機械的なものであるという。

以上が概要である。

このタクトとリズムの関係、あるいはクラークスのいう〈靈魂〉と〈精神〉の問題について芥川也寸志(音楽の基礎、岩波書店)は以下のように述べるという。

このような生の根源に結びつくリズムに対して、拍子はそれとも対立し、自由を制約する人工的な概念的な原理で…非常にしばしばリズムそのものであるかのように混同して考えられがちである。拍子はあくまでも合理的に考えられた人工的な時間秩序であって、拍子を全く持たない自由リズムも存在する。

藤田は、拍子とリズムの関係を川床と（あるいは堤と）川の流れにたとえて以下のように述べる（前掲 pp. 181-182）。

流れはふだんは川床や堤に対して極めて従順であるが、一つ間違えば川床をえぐり、堤を破壊する凶暴なエネルギーとも変貌する。水の流れは、生の根源に結びつきリズムの自由性とダイナミズム、クラゲスのいう生命の生ける原理たる靈魂の流離と飛翔を思わせる。これに対して拍子は、まさに合理的で禁欲的な近代精神である。川の流れを規格化し方向づける空間的人工的な川床や堤に似ている（拍子とリズム、川床と水の流れを常に相容れざるもの…と捉えるのは適切ではない…。むしろ対立しながら依存し合うもの、その対立と依存の中から生まれるものこそ川の流れであり、リズムではないだろうか。）

と流れ学説から論じる。

一方、〈引く〉すなわち、空間的な〈形態・形式・姿〉にその原型を求めようとする学説は日本のリズムとしての〈間〉に近似するとして多くの事例をあげている。〈間〉によせて、「非常にしばしばリズムそのものであると混同されがち」な拍子（タクト）がリズムに他ならないという通説について、日本民謡にふれ、「自由な民謡的表現とは縁遠いもの」と評している。そしてこのような通説的解釈は、明治以降の西洋音楽を音楽教育の中心におかざるをえなかったことが一つの大きな理由と結んでいる。

さらに、日本人は本来呼吸のリズム、すなわち〈間〉のリズムを基本としてきたが、明治開国に伴い軍隊訓練として集団で行進をする必要があり、集団のリズムとして拍節リズム（いわば脈拍のリズム）を学んだのであると言う。

つまり、藤田は一般的な解釈を踏まえて、

リズムとは律動と訳し音楽用語として使われるが、広くは天体の運行、四季の移り変わり、身体運動行為や心理、生理作用、言語絵画、形態など運動、時間、空間のすべてにかかわり、かつ、生成発展する「存在そのもの」中に深く根ざしているもの。（P. 175）

と定義した（社会科学事典 鹿島出版）。

そのうえで、中井正一のリズムや美の捉え方（美学入門1951、リズムの構造1932）に影響を受け、

リズムとは、人間の持つ最も合理的な行動様式—子どもも大人を問わず、人間があるべき自分を捜し求め、あるべき自分に邂逅し、あるべき自分を創造する時間的わくぐみないしは時間的<sup>レ</sup>形成<sup>レ</sup>といってよいだろう。そうしたリズムともに、自分が自分になる。そのリズムを探し求め、つかみとること。自分がいきる（あるいは自分を生かす）リズムをよみがえらすこと。リズムもまた人間にとって一つの出会いである。（P. 190）

とまとめている。

藤田は、中井のリズム論が数学的解釈（時間計量としてのリズムの捉え方）や存在論的解釈（リズムの原始的構造である呼吸、歩行、脈拍などのものが、単なる拍子として時間的構造を逃れて全て一刻一刻の命をかけた全存在である）を乗り越えて弁証法にさしかかる解釈に感銘を受けている。「生きること自体がすでに歴史という巨きなリズムの上にのった一つのリズム現象」「ある時代や社会が新しいリズムを生み、そのリズムがまた一つの歴史と生き方を切り開くというダイナミズムの理解（前掲、藤田、P. 203）」「歴史のうねりのようなリズムと表面的にはげしさをくわえる鼓動とを聞きもらさず、同時に聞き分ける鋭さを持ち、歴史からコミットされるのではなく、歴史に主体的にコミットする立場（前掲、藤田、P. 203）」をとる。

## ②リズムの意味の深奥さと解釈の姿勢

リズムは、常に秩序立てようとする方向と混沌としながら流れ、動いていこうとする方向とが対立しつつ調和を求める根源と理解した。そして、中井が言う、リズムを人間の（あるいは自分自身の）生き方や「生」との関わりのうちに見つめる視点、リズムの本質や意味の奥深さ、そしてそれを問う姿勢にあらためて「リズム」について問うことのその奥深さを思い知らされる。しかしながら、藤田の論は、文化や生き方など、やや人間の側からだけ捉えるというか、主観に傾いているようにも思える。やはり人間を自然界の一部として捉えた生命リズム論や、



人間の運動メカニズムの視点からもリズムについて確認しておきたい。

## 2) 生命の時間、人間の運動のリズム

**【生命の時間】** 時間生物学では次のよう考えられている。生物体は、細胞、組織、器官、個体、個体群（種）などのさまざまな階層構造を成しており、そのそれぞれの階層は、それぞれ自律した周期性の異なるリズム（内因リズム）を持って活動している。そして、それらのうち個体の階層以上のリズムは、潮汐、日周、太陰（月周）、年周などの外界（環境世界）の運行の周期とほぼ一致する。これらのリズムは、外界の運行の周期とぴったりと一致するのではなく概ね一致するので、概リズム（サーカリズム *circa-rhythm*）と呼ばれる。生物個体内でこのリズムをつかさどっている体内時計（ペースメーカー）は、細胞、組織、器官などの階層の内因リズムを“統合（内的同調）”するように機能し、外界の運行の周期に対しては“同調”するように機能している。たとえば、「昼行性」とか「夜行性」というリズムに“統合（内的同調）”することによって「日周」という外界の運行の周期に、また、「冬眠」「繁殖期」「鳥の渡り」というようなというリズムに“統合（内的同調）”することによって、「年周」に“同調”しているのである。またたとえば、外国へ飛行機で行くと「時差ぼけ」になる。それは、個体としてのリズムの統合が一時的に失われている状態であり、同時に外部世界の運行の周期（自然環境の位相差）に“同調”しなくなった状態でもある。しかし、一時的に失われても積極的にリズムを創って“統合（内的同調）”を求めるために次第に外部世界の運行の周期に“同調”することができる。「昼行性」や「夜行性」をもつ生物も同様であるが、種に内的リズムとして決定づけられている「昼行性」や「夜行性」を越えることはない。この点が人間とは異なる。（梅林誠爾：生命の時間・社会の時間、青木書店、2000、pp. 25-50）

**【人間の身体運動のリズム】** また、この“統合（内的同調）”と“同調”は、人間の身体運動においても同じように機能していると捉えること

ができる。たとえば、リズムカルに反復される身体運動中には心臓の筋収縮による身体の上端への血液の拍出と、筋肉運動に伴うミルキングアクション（絞り出し）による静脈血の環流とがうまく“カップリング”した時、運動効率が高まるとともに、運動している人間には「快」の情動が生まれるのだという。このように、細胞、組織、器官などの無数の異なった周期性をもつリズムが内的に“統合（内的同調）”されることによって、外界にうまく“同調”して運動を続けることは、他のさまざまな形でも営まれている。この“統合（内的同調）”と“同調”の崩れた運動実施は「不調」であり、運動者は「快」を感じられない。（山崎健：走運動の発生に関する若干の理論的考察、現代スポーツ研究会、2003、発表資料）

## リズムの階層構造

以上のことから、次のように理解できる。人間においては、こうした生物体や身体活動階層のリズムを基盤として、その上により積極的に選択性の高い“文化”や“社会”や“民族”などの階層のリズムが重なり合っている。物質界にはある時間秩序があって、生物は自らを内的に統合しながら外界（物質界）に同調して適応しているが、人間は、さらにその統合と同調の形を選び取り、創りだして行く自由度の高さを持っている。つまり、物質世界のリズム－生物のリズム－人間のリズム－文化のリズムという4階層が想定でき、それらが、重階層の構造をかたちづくっていると理解できた。

## 「踊ること」と「リズム」の関係について

これを問うとき、民俗芸能のリズムを見ておきたい。

## 3. 黒川さんさ踊りを例にした、民俗芸能に見る動きのリズム

進藤（1994）の論考を土台に、黒川さんさ踊りの「庭ならし」<sup>11)</sup>を例に論を進める。以下に口唱歌（舞踊の伴奏楽器である太鼓の打ち方を示す）と動き（リズム）の関係を示す。

微妙に「点」の表記位置が異なる。それは、まず足場を決め、そこに腰を載せて（足腰）、

(カットー)				
足腰				
ダーン	コーン	ダンカト	カットー	
点	点	点	足腰	
ダーン	コーン	ダンカト	カットー	
点	点	点	足腰	
ダンカト	カトカト	ダンカト	カットー	
点		点	足腰	
ダーン	コッコ	ダンカト	カッ (無音の「トー」がある)	
点	足腰	点	点	
カーッ	カートー	ダンカト	カートー	カーッ (カットー)
	点	点	足腰	点

\*実技研修を踏まえ、筆者作成 2003

歩きながら手（点）の表現を結んでは解き、また結びながら進むこの踊りのリズムの取り方を表す。この踊りは一見4拍の動きに見える。しかし、1, 2, 3, 4, と等間隔の拍で踊ると似て非なる動きになる。なぜなら、足の向きと運ぶ長さ（移動距離）に応じて微妙に足運びの速さが異なるからである。

このことについて小林（1991）は、「音の幅全体を使って歩いている。だからこそ、音のリズムを区切ってゆくようには足並みが揃って見えない」「リズムの頂点から頂点へ、あるいは形の一点から一点へ向かって動くというよりも一音一音の長さを生かし切る。…『形』に至るまでの、あるいは『形』ができあがったと見る間に消えて行く一連の『流れ』を生かし切る」と評す。また、アフリカの太鼓の響きと動きについても「音の呼吸が動きをつくりだす」と共通点に触れている。（小林正佳人：踊りと身体の回路、青弓社、1991）

ここに、うねりともいえる流れと、一定ではない刻みとが産み出す「リズム」が読み取れる。ロックやヒップホップという並びには据えられない独特な「和のリズム」とでも呼ぶ領域がある。さて、これをどう位置づけるのか。

#### からだに刻まれたリズムの取り方

ビデオに映る筆者の動きには、足場を築く間を取らずにいきなり足の上に腰を載せる等、これまで学んできたモダンダンスやジャズダンス、バレエなどの身体の使い方が確認された。無意識に身につけた身体の使い方が現れていた。だからこそなお、**舞踊教育でどんな身体（動き**

**方）を育むのがよいのか。どんな音楽でどのように踊るのか、問題は大きい。「拍に合わせる」と「リズムにのる」とは、似て非なることと実感する。**

### Ⅲ. まとめにかえて

さらなる課題が浮上したがその解決には至らない。が、しかし現時点のまとめをしておく。

#### リズムダンス導入の経緯

平成10年の学習指導要領の「心と体の一体化」という理念の延長に「体ほぐしの運動」が導入され、それと軌を一にして同様な期待を込められたことが挙げられる。加えて、「表現」に傾いてきたきらいがあるから、もっと気楽に「踊ること」を重視した民間教育研究団体に関わっていた方々の提案でもあった。

#### リズムダンス導入後の学習指導要領に則したその内容

一言でいえば、「リズムに乗って自由に踊る」である。ただし、「リズムに乗る」の意味については明言されていない。

#### リズムとは、リズムにのって踊るとは、筆者の理解

リズムは、自由で混沌としてエネルギーを内蔵している〈流れ〉と、それに対し秩序を与えようとする志向、あるいはその場に形象しようとする〈引き〉とが一体となってリズムという。

リズムに乗って踊るとは、「規則的に繰り返すことによって勢いづいたり、反面、生のリズムはそれらを乗り越えて沸きあがったりすること、あるいは一瞬の動と動の間の緊張を求めたりしながら延々とこれらの活動が続くこと、音楽にただ合わせるのでもなく、ただかつてに沸かすのでもなく個人内での統合（内的同調）と外界（他者や音楽）への同調がうまくかみ合った（出会った）状態が『快』として感じられながら続くことを意味する」と理解した。

ゆえにその指導方法は、外のリズム（音楽リズム）にいきなり同調するように働きかける前に、十分に個々の内的同調（統合）を求める時間と内容が求められる。筆者は各自が口伴奏で遊ぶところから導入している。

さて、課題は以下のとおりである。

### 「文化概念」と「教材概念」、生涯学習を見据えた教材

学習指導要領は、いつの時代も「制度」に傾いたり「子ども」に傾いたりとその間を揺れてきた。リズムダンスは、「子ども」に傾いた機能的特性論に依拠して提案された。そこに「文化概念」との検討がなかった。

「リズムダンス」導入当時、ジャズダンスが興隆したが次第に衰退し、ショーダンスとして残ったが、やがてファンク系が台頭した。そして当時のニューヨークスラム街文化の一端であるヒップホップが創出された。彼らの暮らしがあつてヒップホップダンスが生まれた<sup>12)</sup>。

学校で扱うダンスが世界の舞踊文化の普遍性を担保しつつ、扱う舞踊の種類によって、日本や諸外国の時代と文化を押さえた学習教材であるべきだと考える。

### 始源性と学校階梯に即した学習内容とその系統性

リズムの問題も、「リズム感がよいとか、このリズムが好きだとかの音感や好みの問題なのではなく（前掲、藤田、P. 252）」という捉え方と照らすとき、ただ「楽しかった」という体験にとどまらず、その体験が体に何を残し得るのか、踊りと文化に対してどのような認識を育てられるのか。また、始源性は担保できても学校階梯に即した学習内容はどうすべきか。創作ダンス（表現）において、「群・構成に変化やまとまり」を求めるのは必然であるが、リズムダンスの発展の方向も同じという提示には必然が無いといえよう。この領域の特徴は、あくまでも「踊る」重視であり、動きや構成を覚える必要のない踊り、再現性を求めない踊りと解釈する。

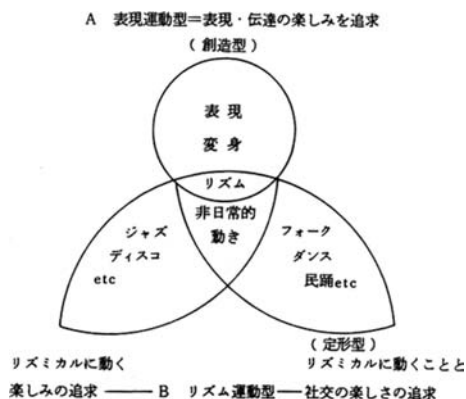
### 似て非なる「拍にあわせる」と「リズムに乗る」

無機的・抽象的な拍節ダンスではなく、真に「リズムに乗って踊る」を体験するには、日本の民俗芸能を踊りきるや他の国の文化に根差す踊りを丸ごと体験する（踊る）ことに尽きるのではないか。あるいはどの発達段階においても「始源性の体験」だけでよいのではないか、そ

れでも十分「見せ合い」に耐える作品になると実践を踏まえて断言できる。現時点における筆者の意見である。

### 註

- 1) rhythmic dance と訳せないと判断し、ローマ字表記とした。
- 2) 中村恭子（2017）：現代的なリズムのダンスの学習内容と指導方法の検討：ヒップホップのリズムを教材として。
- 3) 田巻似津香他（2017）：「リズムダンス／現代的なリズムのダンス」における指導内容の明確化と構造化に向けた試み。
- 4) 日本女子体育連盟主催第37回全国女子体育研究大会佐賀大会、研究紀要大学部会研究Ⅵ-2、pp. 98-102に発表した。
- 5) 現行の中学校学習指導要領解説・保健体育編、平成20年7月、文部科学省、P. 130。
- 6) 「拍の刻み方」とは、1拍を更に刻んで動くこと。
- 7) 北信濃大会（1982）要項の87頁に、前年度（1981）第26回東京大会提案の下図を引用している。



- 8) 全国に広がるよさこいのサイトでは、約100の祭りを掲載している。名称は「YOSAKOI」「よさこい」と様々ある。  
<http://www.welcomekochi.jp/event/yosakoi/yosakoimain/hirogaru.htm>（最終閲覧日2017年12月30日）
- 9) 本学の体育科教育方法論（教員免許取得必修科目）において2014～2017年毎年質問したところ約100人中約9割が運動会等で経験していた。
- 10) 拍節とは、についていくつかの辞書を比較した。端的に言えば、「いくつかの拍を一つのまとまりとし、アクセントの規則的反復によって一定の周期に区切られる時間的単位」を指す。

- 11) 以下、進藤の言説を一部省略しながら引いている。

さんさ踊りは近世初期の城下町盛岡を中心に形づくられ、岩手県中央部に広く伝承される盆踊りである。

1 曲目に〈庭ならし〉で踊りの場を浄め、…〈庭ならし〉は、この踊りが踊れるようになると他の演目が容易に踊れるようになることなどから、黒川さんさ踊りの基本と言われる。身体を縦に大きく振り、円陣を時計回りの方向経、左足を軸にして自転しつつ回るという特徴を持つ。

技法の解明は進藤が須藤武子（日本民族舞踊研究会代表）の提言を受けながら20年の実践を経て読み解いたものである。筆者も両氏に指導を受け体験している。（進藤貴美子：民俗芸能の身体技法―黒川さんさ踊りの「庭ならし」を例に一、年報いわみざわ15号、1994）。

- 12) ヒップホップ文化や歴史、踊り方については七類誠一郎：黒人リズム感の秘密、郁朋社、1999、と奥村浩三監修のHp、アドヒップ

Dance Delight Magazineを参照している（最終閲覧2003年9月）。

## 参考文献

引用文献は文中に示した、参考文献のみ下記に示す。

- ・岩田靖（2016）武道とダンスの今日的課題を  
探る、体育科教育2016年3月号、10-14頁。
- ・小学校学習指導要領解説体育編、中学校学習  
指導要領解説保健体育編、1998、2008、2017、  
高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育  
編、1999、2009、文部科学省。
- ・舞踊教育研究会編：舞踊学講義、大修館書店、  
1991。
- ・松本富子：現代的なリズムのダンス、新学習  
指導要領による中学校体育の授業下巻、杉山  
重利・高橋健夫他編集、大修館書店、2001。
- ・村田芳子、松本富子：シンポジウムこれからの  
舞踊教育を語る、舞踊教育学研究 No. 2、  
1999。